

## 第50回静岡県地学会年会にあたって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024604">https://doi.org/10.14945/00024604</a>

## 第50回 静岡県地学会年会にあたって

和田 秀 樹 (静岡県地学会会長)

本会の設立は1964(昭和39)年6月、機関誌「静岡地学」創刊号が発刊されたのは11月、今年で半世紀が過ぎようとしている。地球を知るための地学教育普及を目的に創設され、当時若く元気な会員により地学教材研究や最新の研究動向などが紹介されている。プレートもハヤブサもない、生の天地のからくりを如何にして生徒に興味を起こさせるか、多くの先達が知恵を絞っている。50年後、地学会周辺は、2012年9月に伊豆半島ジオパーク登録、2013年6月富士山がユネスコ世界文化遺産登録と新聞を沸かせ、南アルプスのユネスコエコパーク登録への取り組みにも熱が入ってきた。来年度から、亡き池谷元会長が夢に描いた静岡県自然史博物館の開館に向けて、実行部隊であるNPOネットワークが静大の隣に移転が決まった。苦節10年漸く静岡においても、自然探求の拠点と新たな組織作りが始まろうとしている。折しも、静岡市内である南アルプス二軒小屋の地下400mを走り抜ける超伝導リニア計画が、環境影響評価法による具体的な環境影響への配慮を考慮した計画書である準備書段階になった。(参照 <http://www.env.go.jp/policy/assess/2-2law/>)

南アルプスは、活動的プレート沈み込み帯日本の代表、世界で第一級の隆起速度で知られ、この地球の営みを知らずして真の安全はない。将に復興日本に期待される地学の時代の幕開けである。

2011.3.11の津波被害の復興と原発損壊による果てのない後始末は、高々100年しか生きる事のできない人間が、自然現象の地球の時間感覚を持ち合わせることなく進化してきたという弱点を突かれた。だれしも、地球時間の感覚は持てず、日常の慣性は、人間の寿命に比例した時間法則が支配している。肉眼で見えない世界を電子顕微鏡の画像で見ようには行きそうもない。地質現象の現場に赴きそのものを手に触れ、諸々の知識とつなげるほかはない。

先の運営委員会の東部支部報告にあるような、生活空間の中で地学の知識が活かされたり、新たな発見するような体験を味わう場を作っていたいただければと思う。富士山の活動史や自然史は、最近本誌に度々投稿されている地道な観察による富士山の研究結果に見るように、2万年に渡る新期富士火山活動の変遷とその自然を新鮮な目で見ることが出来る。今後、NPOとの連携は必須で、地球時間を考える地学の紹介をしながら動物・植物・地域の歴史も取り込んで、多角的地球環境動態を見る複視眼を養い、新たな発見を増す活動にしてほしいと思う。そして何より、老若問わず、新たな仲間を増やすための魅力を付加しなければならない。